明治大学外国人研究者招聘制度 報告書

<招聘教授・研究員の情報 / Guest Professor・Guest Scholar>

氏名	張 愚
Name	
所属機関(派遣元)	中山大学 外国語学院
Affiliation (Home Organization)	
現在の職名	副教授
Position	
研究期間	2024年2月26日～8月20日
Period of Stay	
専攻	日本語史
Field of Research	
ホスト教員氏名と所属学部研究科等	田中牧郎 (国際日本学部)
Name of host teacher and affiliation at Meiji University	

<外国人研究者からの報告 / Foreign Researcher Report>

①研究課題 / Research Theme
日本語史における和化漢語の意味的変遷
②研究概要 / Outline of Research
<p>日本語の語彙史研究において、漢語の受容と変容はかなり研究の蓄積がある分野といえるが、依然として追究の余地は残っている。たとえば、漢語の品詞性や構文的特徴がどのような変化を辿ってきたかを究明することも、その一つである。招聘者は、これまで主に漢語の意味変化がその文法的特徴とどのように関わっているかを考察してきたが、今回も、これまでの研究成果を踏まえた上で、さらに調査範囲を拡大した。中でも、特に和化漢語の構文変化と用法の消長について調査を進めることができた。</p> <p>従来の語史研究では、漢語の構文的特徴を視野に入れて通時的に分析したものは殆どない。それに加えて、研究者の関心は最初から、「変化していく用法」や「後の時代まで使用され続けてきた用法」に向かいがちである。従って、「語の臨時的な使われ方」や「消失した用法」については、たとえ気付いたとしても、正面に据えて分析したものはさほど多くはない。</p> <p>今回の明治大学での研究では、張愚(2021)に引き続き漢語「迷惑」を取り上げ、その本来の使われ方を押さえたうえで、中世以降における構文の変化と用法の消長について記述し、両者の相関関係を分析した。また、「機能的利便性」や「対人配慮」などの観点から、その変化と消長の要因についても考察した。</p> <p>漢語の構文変化や用法の消長に関する通時的な研究の発展は今後も期待されよう。今回の研究は、「迷惑」一語を対象とするものに留まらざるを得ないが、今後は、構文的特徴を軸に、「笑止/咲止(もとは勝事)」「我慢」「成敗」「褒美」「是非」「非道」といった和化漢語も視野に入れてその諸用法の消長過程と原因を考えていきたい。これらの漢語については、すでに優れた通時的な研究が幾つか見られるが、先行研究で積み重ねられてきたその研究成果も、新しい目で見えてみることにより、新たな発見・再発見につながっていくと考えられる。</p> <p>さらに、今回の研究は和化漢語の意味用法の変遷に留まっているが、今後は和語を含む「漢字語」も視野に入れたい。日本中世の変体漢文には、「使役」から「受け身」用法に変化した漢字語の例文が見られる(例えば、「令(しむ)」という漢字語)。これについては、これまで日本の国語学者に「放任用法」の延長上にあるものとして捉えられてきたが、それに対し、招聘者は、中国語とツングース語によくある「使役→受動」の変化パターンに一脈相通するものと考え、考察を深めていきたい。</p>
③招聘期間中の研究活動の実績 / The research results as Guest Professor・Guest Scholar
<p>明治大学での半年間は、素晴らしい環境で大変充実した研究活動を行うことができた。ホスト教員である田中牧郎教授と、コーパスの利用方法や日本語史上の解釈について、議論を重ねる形で研究を進めた。大学院の田中牧郎ゼミナールで数度の研究発表を行ったことも、研究の進展に非常に有益だった。元助教の高橋雄太氏や院生の古谷創氏をはじめとした、田中ゼミの卒業生・院生と意見交換できたことが、特に有意義であった。そこで口頭発表した内容をまとめた論文を投稿中である。</p> <p>招聘期間中、和泉キャンパスの図書館や中野キャンパスの研究室を活用し、明治大学の持つリソースを思う存分に利用させていただいた。そこで得られたアイデアや成果をまとめ、中国で開催する学術フォーラム(中山大学文学部主催の「人文工坊第七回: 日本古文獻与漢字漢語研究」及び、南京師範大学主催の「第九回全国語言学核心期刊主編与青年学者対話フォーラム」)で発表した。</p>